

復興支援ボランティア体験

(株)松尾工務店土木部部長
中村 光昭

ゴールデンウィークを利用しての復興支援活動第2回目となる5月5日夜に社員有志22名と本社を出発し、東北自動車道の国見PAで小休止を挟み明るくなるのを待って6日6時40分頃に石巻市のボランティアセンターがある専修大学へ着きました。

敷地内を見渡すとたくさんのテントが設置されており、何日も泊り込みでボランティア活動に携わっている人たちが居ることを知り、感動を覚えると同時に自分も参加できてよかったとの思いと、何故か安堵感のような何故か少し変な思いに駆られました。

支援活動は、被災者が支援の要求をセンターへ申請し、センターがボランティアを振り分ける仕組みになっており、支援内容は、被災者毎に必要な支援が異なるため被災者の指示に従い活動することになります。被災者の元へ移動する前に幾つか注意事項の説明を受けるのですが、一番注意してほしい点として、余震がまだ続いており

大地震の可能性も高く、津波が発生した場合の避難場所の確認とそこに行くまでの経路を必ず確認するよう説明があった時は、ここは未だ危険エリアであると実感し緊張しました。

ボランティアセンターの担当者に教えられた住所を頼りに海の方へ車を走らせ少しすると景色が一変し、現実離れした悲惨な光景が目に入ってきました。ニュース映像等で目にしておりましたが、実際の光景を目の当たりにし絶句してしまいました。まるでミキサーに入れて粉々にしたかのように、形あるものが無残な姿になっており、屋根の上には漁船が載っており、学校のプールには車が、想像を絶する光景に自然の猛威の恐ろしさを思い知らされました。

20分程車を走らせると目的地に着き、現地のボランティア活動の方から避難場所と作業内容の指示を受け3班に分かれることになりました。私が伺った家は平屋の民家でしたが津波が室内に入り込み、ヘドロ、木





屑、家具が散乱し、泥だらけになったアルバムや額に入った写真等もあって、そんな生活の跡を眺めていると突然失われる日常生活を思い、思わず涙してしまいました。

活動内容としては、室内のすべての物を集積場所に移動し、ヘドロを撤去することでした。まず集積場所までの通路を確保することから始める必要があり、人海戦術を用いて行いました。会社で参加していることで既に組織が出来上がっているため、人海戦術に適しており、センターの人も驚くほどに早く終了する事が出来ました。さすが我々建設会社は、かかる場合のプロであると、やや自慢気な気持ちとなりました。

作業も終わりに近づいた頃に別の班から応援の要請があり、もうすぐその日の作業終了予定時刻でしたが、みんなで話し合い現地ボランティア活動の責任者の了解を得て別の復興の手伝いをし、最後までやり遂げる事となりました。1時間の超過と成りましたが22名全員で作業したこともあり、何

とか依頼された目標を終えることができました。

被災地は予想以上に悲惨な状態でしたが、しかし被災者の方々は強く、明るく、礼儀正しく、そこで頑張っている様子があり、少しでも早く幸せな日常を取り戻せることを心から願い帰路につきました。

現地での状況を目の当たりにして、我々にももっとできることがあるのではないかと、という気持ちからボランティア活動に参加しようという思いが深まり、社員から有志を募り、この度石巻市でボランティア活動を行いました。

4月から8月まで合計10回にわたり、レンタカーを借りて運転を交代しながらボランティア活動を行ってきました。社員有志の中には4回、5回と参加した人も居ます。最初は社員有志のみでしたが、次第に協力会社にも広がり、総数で社員131名・協力会社6社20名の参加数となりました。